シシリー島のニキアス
—— プルタルコスの伝記記述の方法について
とくにトゥキュディデスとの対比において ——

柳 沼 重 剛

1

プルタルコス (以下 Plut と記す) が『アレクサンドロス伝』の冒頭で「私は歴史ではなく伝記を書く」と言っているのは有名で、それでは何を意図して伝記を書いたのかと言うと、それは人物の性格と性向[1]を明らかにすることだった、ということもよく知られている。『ニキアス伝』(以下 *Nik* と記す) の冒頭でも Plut はまず、私はトゥキュディデス (以下 Thuk と記す) の向うを張るつもりはないと断わり[2]、しかしそうは言っても、Thuk が記しているニキアスの事績には彼の性向や気質[3]が隠されているものがあるので、それまで無視する訳には行かないとも言っている。それなら、そう宣言した上で書かれた Plu^{t} のニキアスは、Thuk の『歴史』(以下 *Hist*) の登場人物としてのニキアスとどう違っているかを見ようというのが小論の主旨で、ただしシケリア (シシリー) 遠征にだけ視野を限ることにする。*Nik* では 12–30 節、*Hist* では第 VI, VII 巻の全部がそれに当っていて、こうも分量が違う (*Nik* は *Hist* の十分の一強の頁数しかない) と比較もしにくいが、比較の主眼は、どちらのニキアスが本物のニキアスに近いかではなく、むしろ、どちらの方がわれわれにより明確なニキアス像 (それが正しかろうと間違っていようと) を抱かせてくれるかに置く。

2

Nik 12 は *Hist* VI. 6–26 の要約と言ってもよい内容を持つが、12. 1–2 は Thuk が述べていないことで、ここでは、遠征の可否を議決するための民会が

開かれるよりも前にアルキビアデスが民衆を買収していたと書いてある。だから民会の席でいかにニキアスが反対を唱えても誰も味方にならなかった(12. 3)ということになる。しかしこれはそう簡単には呑み込めないことで、というのは、*Hist* を見ると (VI. 9-14)、ニキアスのこの時の遠征反対論というのは、Plut も認めているように (14 節) 健全な思慮に富んだものであって、これだけ常識的なことを言われても耳を藉さなかったというのは狂気と言う他なく、しかもアルキビアデスが人気でもあったのならともかく、実は真反対で、恐れられたり憎まれたりしていたのである[4]。もっとも Plut は『アルキビアデス伝』17 では、アテナイ人はペリクレスの存命中からシケリアを欲しがっていたと言っていて、それなら少しは話も分るが、*Hist* で初めてシケリアが問題になるのは III. 86, 427 B. C.、つまりペリクレス死後のことである。しかしとにかく Plut (*Nik* 12. 3) が、たとえ反対でも国家に非協力的だと思われるのを恐れて黙っていた人々もいたと言い、Thuk (*Hist* VI. 13. 1) が、臆病者だと言われることを恐れずに反対投票せよ、とニキアスに言わせているような空気があったことは確かだった。恐らくアルキビアデスの他にも、*Hist* II. 65 がペリクレスと対照して述べている幾人ものデマゴゴイがこういう空気を生み、そして煽っていたろうし、その上、スパクテリア以来、よく言えば慎重、悪く言えば柔弱、という印象がニキアスについて回っていたに違いない。とにかくこの遠征軍が出航する日に、それを見送りに大勢の人々が集って、そこで初めて、遠征を決議した時には感じなかったような痛切な不安をその人々が感じた、というような状況だったのである。

この遠征軍の将軍に選ばれたのがアルキビアデスとラマコスと、事もあろうにニキアスだったことはどの資料にも書いてあるが、Plut は、大胆なアルキビアデス、血の気の多いラマコスと慎重なニキアスとは組合わせの妙を得ていると人々が思ったと書いている[5]。

Hist から知り得ることの一つに、ニキアスが遠征に反対したのは第1回の民会においてではなく、すでに議決された遠征の準備について討議するためにそれから4日後に開かれた第2回の民会においてで、しかもニキアスが将軍に任じられたのは第1回の民会においてであった、ということがある (VI. 8)。この遠征に反対で、しかもあれだけ立派な演説をやった人が、その4日前には実は唯々諾々とその将軍になることを承知していたというのは解せぬことだが、それがやはりニキアスの弱さであると同時に、まともに反対しても到底聞いては貰えない空気が第1回の民会にはあったのだろう[6]。*Hist* VI. 9. 3 でニ

キアス自身「諸君の性向に照らして見るなら私の言葉など無力なものだろう」と言っているのもそのことに関係している[7]。なお、遠征軍の任務として (1) エゲスタを助けてセリヌスを討つこと、(2) レオンティノイの再建を助けること、(3) その他アテナイに利益をもたらすような最善の手を打つこと、が議決されている (*Hist* VI. 8. 2) が、この (3) が実はシュラクサイを討つということだということは、恐らく誰もが承知していただろう。

Nik になくて *Hist* にあるものと言えば何と言ってもニキアスとアルキビアデスの演説だが、ニキアスの演説が諄々と説く型であるのに対して、アルキビアデスのは押しまくる型であり、事柄を勇ましく断定的に決めつける。そこへ行くとニキアスは何を言っても愚痴っぽく聞える、というのは Dover の評言である[8]。とにかくアルキビアデスの演説を聞いたアテナイ人は一層熱烈に遠征を支持し、ニキアスは止むを得ず将軍になることを引受けるが、市民たちがびっくりするような軍備を要求したら決議を撤回させることができるかも知れないと再度登壇してその通りの演説をする (*Hist* VI. 19–23)。所がこれがたいへんな思わく違いで、ニキアスは自分が要求した通りの途方もない軍備を約束されて、こうなってはどうにも仕方のないことになった[9]。

Nik 14 はニキアスのこういう態度を、一方では思慮深いと褒め、一方では躊躇し過ぎたと叱る所から始まる。遠征反対の意見を軽々しく変えなかったのは思慮に富んでいたが、市民たちに遠征を思い止まらせることもできず、将軍を辞退したいと申入れても聞き容れられずに船に乗ってしまった以上、後を振り返りながらいつまでもくよくよして同僚の将軍の気を挫き、行動の機会を逸するに至ったのがいけないというのである。こういう所でこの種の道徳的評言を挿まなければ気がすまないのはいかにも Plut 流だが、出来事の経緯に関しては *Hist* のかなり大まかな要約になっていて、今後この傾向はしばしば見られる。面白いのは Plut が「すぐさま敵に攻めかかって何が何でも運命を戦に賭けるべきだった」と、ラマコスの意見をそのまま自分のニキアス批判の言葉に利用していることである[10]。実はラマコスのこの言葉は、レギオンに船隊が到着した時3人の将軍が今後の方針を討議した際に述べられたものだが、Plut は常に「いつどこで」ということには無関心である。また3人の将軍の提案内容は Plut が書いている通りだが、例えばラマコスがすぐにシュラクサイを攻めろと主張するのは、今ならシュラクサイの応戦態勢が整っていないのと、軍勢というものは最初見た時が一番恐ろしく見えるものだからで (*Hist* VI. 49. 1)、

こういうことを言う彼は3人の中では最も正直な軍人である。ニキアスはまず初めに「我々が派遣された主要な相手であるセリヌス」と実に官僚的な正論を吐き (*Hist* VI. 47. 1)、あとはアテナイの国力を示すために全船隊で島を一巡し、かたがた味方にし得る国があるかどうかを見、それがうまく行かなければ引揚げる、と言葉を続けて2人の将軍を驚かす。エゲスタを助けセリヌスを討つのがあくまでも遠征の名目上の目的であり、だからこそ遠征軍の任務に関して決議された時も、これが一番目に挙げられねばならなかった。しかしこれだけの大軍を率いてここまで来ている（しかもこれだけの大軍――セリヌスを討つだけなら巨大すぎる――を用意させたのは他ならぬニキアスである）以上、もはや名目上のこの主目的は文字通り名目にすぎず、本当の目的はシュラクサイ攻略にあることは皆が承知のはずである[11]。しかし名目にすぎなくても名目としては生きていて、だから名目通りのことを主張する人間に対して驚いたり嫌な奴よと思うことはできても咎めることはできない。これがニキアスの安全第一主義の一面で、こういうことは Plut をどう読んでも分らない。アルキビアデスが「かほどの軍勢を率いて海を渡って来たからには、為す所なくおめおめ帰れるものか」と怒る (*Hist* VI. 48. 1) のは当然なのである。――所が、やはり船隊のレギオン滞在中に、先にエゲスタに実情視察に行っていた3艘の船が帰って来て、アテナイはエゲスタに一杯食わされていたことが分るという件がある。これはニキアス以外の2人の将軍には青天の霹靂で、ニキアスにとっては予想通りのことだった (*Hist* VI. 46)。つまりニキアスの方が賢かったわけで、そのことで彼は幾らかは得意になってもよかったけれども、実は上記の3人の将軍の協議は、このことが判明して、さてどうするかというので行われたものなので、こうなるとニキアスの提案はますます分らなくなる。彼の立場に立つならば、セリヌスを討つことすら止めて即刻帰るべきであろう。

この協議後アテナイ軍が何もしないで時を過して、そのために味方の士気を衰えさせ、敵の士気を高めたような印象を *Nik* から得るのならば、やはり *Hist* によってそれを多少修正すべきである。実はアテナイ軍もいろいろのことをやっていて、とくに注目すべきは、このアテナイ軍の行動はアルキビアデスの提案に最も近い線に沿うてなされているということである。とくにアルキビアデスが召喚されて彼らのもとを去ってからは余計にそうなっていると思える。このことについては Dover の注釈以上のことを言う能力を私は持たないが、ニキアスという人物の分りにくさを示す一例にはなる[12]。

Nik 16 は *Hist* VI. 63–71 に当る。アテナイ軍のシュラクサイ上陸作戦である。なかなか攻めて来ないアテナイ軍を見くびっていい気になっていたシュラクサイに対して、アテナイ軍が詭計を用いて大勝利をあげる条。ただし Plut は、これがニキアスのシケリアにおける最も巧妙な作戦だったと称讃して、これをニキアス一人の功に帰し[13]、のみならずただ1度の戦闘で楽勝したかのような印象を与えているが、*Hist* を見ると この詭計は2人の将軍の案となっており、戦闘も2日にまたがっていて、2日目にはニキアスが全軍に激励演説をやっている (VI. 68)。所がこの演説というのが妙に悲痛な響きを持っていて、ここではどう考えてもアテナイ軍が悲痛になるべき理由は見出せないのにニキアスがこういう演説をしたというのは、それこそ彼の性格のせいだと考える他ない[14]。

このアテナイ側の完勝に終った戦でも、*Nik* ではニキアスさえその気になればもっと敵を傷めつけることもできたのにそうしなかったことになっていて、ここでもニキアスの躊躇と警戒心が咎められることになるのだが、Thuk, それにこの件に関してはディオドロス (XIII. 6. 2) やパウサニアス (X. 28. 6) でも、味方に騎兵がいないこと、食糧と資金の調達を必要としたこと、それにもう冬になっていたことなどのために、アテナイ軍にとってはこれ以上の攻撃は思い止まざるを得なかったとなっている。似たことは *Nik* 16. 8 についても言えることで、ここではアテナイ側がシケリア原住民をシュラクサイから離反させようと工作するのだが、*Hist* VI. 88. 3–4 は沿岸地域では失敗したが内陸部ではある程度成功したと言っているのに、*Nik* ではまったくの失敗ということになっていて、これもニキアスの不手際の一例にされる。

Nik 17 はアテナイ軍によるエピポライ総攻撃の条となるが、*Hist* ではエピポライ攻めに移る前に、カマリナを味方にしようとしたアテナイ側が使節を送るとシュラクサイも使節を送って、ここで両者がそれぞれの主張を演説する (VI. 76–87)。さらに VI. 89–92 では、スパルタに亡命したアルキビアデスがそこで自己弁護をし、スパルタに対する忠告を与えている。その結果ギュリッポスがシュラクサイに派遣されることになったのだから意味は大きい。しかし Plut は『アルキビアデス伝』23. 2 でこそこの件に触れているが、*Nik* ではこれを割愛した。なるほどこれはアルキビアデスがやったことで、ニキアスの行為ではない。ないが、今後のニキアスの行為を左右するようなアルキビアデスの行為だった。それを今はニキアスの話をしているのだからと省いてしま

う。これも Plut 的筆法の一つの特色である[15]。

エピポライ奪取そのものは *Nik* 17. 1 のように要約してもよい機敏さと果敢さを以て行われる。ただし *Hist* VI. 96–98 では終始「アテナイ軍」が行動しているのに対し、*Nik* では動詞が 3 人称単数になっていて、この機敏さと果敢さはニキアスのものとなっている。これは 16. 9 でニキアスは「一旦行動を起せば精力的で活潑だったが[16]、行動を起すのをためらったりびくびくしたりした」と言っているのと呼応している[17]。*Hist* ではアテナイ軍はエピポライのある地点に円形の砦を構築するが、その工事の素早さにシュラクサイは度肝を抜かれる (VI. 98. 2)。*Nik* では、この砦の構築のではなく、この砦から南と北に延びてシュラクサイを封じ込める壁の建造の素早さに度肝を抜かれたことになっている。しかしこれは素早かったには違いないが、これに対してはシュラクサイ側の必死の妨害が行われて、ついにニキアスのたった一人の同僚であるラマコスも討死するような戦闘となった。そのためにこの壁はもう少しで完成という所まで行って止まってしまったが、Plut はこの未完成に終ったことをもニキアス一人のせいにして、今度は彼が腎臓病で苦しんでいたので、と言っている[18]。そして Plut はこの節を、まるでここでニキアスの伝記は終かと疑わせるような調子の、些か唐突でさえあるニキアス賞讃の文章で締めくくっている。

とにかくこうして、アテナイ軍にとって事態は全体としては好調だった。シュラクサイの方では休戦を申入れようと真剣に考える所まで追込まれていた。ラマコスの戦死はアテナイにとってはもちろん不安の材料となる。ニキアスと対照的な性格の持主であることによって遠征軍に貢献していた人がいなくなったからである。しかし全体としては事はアテナイの思わく通りに運んでいた。——しかしこの遠征軍の最後の運命をすでに知っている人には、今のこの順調が悲劇的と言ってもよいアイロニーに感じられる。やがて「ペリペテイア」が訪れる。しかもそれはすぐそこまで来ている。スパルタから派遣されたギュリッポスである。しかもニキアスは、ギュリッポスの接近を知りながら何の警戒もしなかった。これは「ハマルティア」であろう。——しかしこのような悲劇を感じるのは、綿密な記録が緊密に構成された文、つまり Thuk の *Hist* によってであって、事実の記録が要約に止まる Plut の *Nik* にはこれはむずかしい。

3

Nik 19 は *Hist* VII. 1-8 に当るが、ここでも Plut の筆は、ギュリッポスがシュラクサイに着いた時の模様にばかり留まって、肝心のニキアスについての記述は散漫になっている。——ギュリッポスがまず、例の砦から延びて建造されたアテナイ側の壁に手をつけた時、それに対するニキアスの対処の仕方を甚だ端的に示している言葉が *Hist* VII. 4. 4 にある。ニキアスはプレンミュリオンの砦というのを築こうと考えるのだが、その理由の一つに「ギュリッポスが来てからというもの、陸上での事態はすでに余り希望が持てなくなっていて...」と彼は言う。しかし、ギュリッポスが来るのを知りながらそれをみすみす放置したのはそれほど昔のことではあるまい。「来てからというもの」とか「すでに」とかいう言葉が非常に奇異に響く[19]。ニキアスはそれほど不活潑になっていたのである。放置したと言えば、*Hist* VII. 3. 3 で、ギュリッポスとニキアスが初めて相対した時、シュラクサイ軍はまだ前回の敗戦の恐怖のために動揺していた。そこでギュリッポスは兵を退かせた。然るにニキアスはそれを追わずにただ見ていた。

しかしニキアスの最も大きな失敗は、プレンミュリオンの砦を築いたということ自体である (*Hist* VII. 4. 6)。完成した途端に水がないことが問題になるなどというのは、常識ある将軍の仕業とも思えぬが、ニキアスはここに砦を築くことの利点にばかり頭が働いて、慎重を以て聞えた人にしては致命的な見逃しをしていたのである。また、アテナイ側がシュラクサイ封鎖のために完成の一歩手前まで工事を進めた壁をめぐっての戦で、初めはシュラクサイ軍が敗れるが、その時ギュリッポスは敗戦の因はわが作戦のあやまちなりと公言し[20]、翌日は戦法を変えて再び攻め寄せる。それに対してニキアスも、ここでの戦闘が今後の行動に重大な影響を及ぼすと判断しつつも、戦列を前に進める以上のことはしなかった。その結果アテナイ軍の決定的敗北ということになったのである[21]。

そこでニキアスはアテナイに手紙を送って、全軍を引揚げさせるか増援軍を送るかにしてくれ、将軍を辞任させてくれと申し出ることになるのだが、*Hist* VII. 11-15 はその手紙の文面である。Dover がこの手紙は *Hist* のこれまでのどの箇所よりも絶望的な文章だと評し、自分以外のものは誰でも何でも咎める気になてっいる、と言っている[22]のは正にその通りと言う他なく、初めから

終まで愚痴ばかりのこの手紙を見ると、ギュリッポスの到着以来のほんのわずかな時の間にこれほど意気地のない人間になってしまったことに驚き、これでは戦えるわけがないと思う。そしてアリストパネスをはじめ何人もの喜劇作者の冷かしの種に彼がなっていたことが思い出されたり[23]、Plut の *Nik* 6. 3–4 でも彼が(実力以上に)運がよかったと思われる例が幾つも挙げられていたことが思い出されたりする。Thuk の *Hist* でも、ニキアスは個人として最もしばしば名前が出て来る人物の一人だが、しばしば出て来る割には、スパクテリア以前には影の薄い人物である。要するに運がよかっただけで、大事業をなす人間ではなさそうである[24]。しかし私はニキアスを軽蔑に値する人間だとも思わない。大をなす器ではないだけで、つまり普通の人間なのである。だから彼はわれわれ同様であって、それ故にそういう彼がこういう事件に巻き込まれたことをわが事として心配できるのである。

Nik 20 は、ニキアスが増援部隊の到着を待っているうちに春になって、ギュリッポスがプレンミュリオンの砦に対して海陸両面から攻撃を加える条である。この戦でアテナイ側は海戦では勝ったが、虚を衝かれた形の陸戦では完敗を喫してこれが大打撃となった。これによって物資の補給がむずかしくなった(このことはニキアスも予想していたろう)。ここに武器の大半を格納していたのを奪われたからで、これもまたニキアスがここに砦を築く時に計算から洩れていたことである。

Plut はこの節で、実際には間をおいて行われたギュリッポスの第2次進攻をまで語ってしまう。これは2日にわたる海戦で、今度は海戦でもシュラクサイが決定的勝利を収めた。Plut によれば、やがて増援軍が到着するのだから今は海戦をしたくないとニキアスが主張したのに、新しく将軍に任じられたメナンドロスとエウテュモデスが、功名心から無理に海戦を企てた。これに対して Thuk は誰の指揮、誰の責任ということは言っていないが、それはわざわざ言うまでもなく3人の将軍に決っているからであろう。それに Thuk が述べているような状況下では、いかにニキアスが海戦を欲しなくてもせざるを得なかったろうと思えるから、これを2人の新任の将軍の責めにするのは酷であり、結局これも Plut の、自分の主人公に対する好意的な見方の表われと見てよい。それよりこの海戦の Thuk の記述 (VII. 36–41) で目立つのは、ギュリッポスがアテナイ側とは比較にならぬほど積極的に、勝つための工夫をいろいろとやっていることで、アテナイ側はほとんど受身である。ニキアスの無気力

が軍全体に伝染したのだろう[25]。

Nik 21 は *Hist* VII. 42-45 に当る。デモステネスの増援軍が到着してシュラクサイをまた震え上らせたのも束の間、決着を急いだデモステネスが敵を深追いしすぎて、そのためにアテナイ軍全体に大混乱が生じて大敗することとなり、増援軍がかえって仇となる。*Nik* ではデモステネスが直ちにシュラクサイに速攻をかけ、それでシュラクサイを占領できなければアテナイへ帰ろうと言う。ニキアスは驚いてむしろ持久戦を薦める。そして (Thuk も *Hist* の中で何度か述べている) シュラクサイ内部の親アテナイ分子から彼が得ている情報のことを述べたが、それを仄めかすに止めたので、将軍たちは要するにニキアスは臆病なのだと信じてデモステネスを支持した、ということになっている。Thuk の記述では、ここでのニキアスとデモステネスの論戦の内容はすべてデモステネスが考えたこととして述べてある[26]。恐らくは Plut は Thuk の描写全体を活画風に拡大すると同時に、慎重すぎる「性格」のニキアスに性急すぎる「性格」のデモステネスを対照させたのだろう。

Nik 22 は *Hist* VII. 46-49 に当る。みずからの責任で大敗を喫したデモステネスが撤退を主張し、兵たちもこれ以上の駐留をいやがった時、ニキアスが強くそれに反対する。このニキアスの態度はこれまでの彼の言動と完全に矛盾する。しかしその反対の理由というのが、例のシュラクサイの親アテナイ分子からの情報ということもあったようだが、それにもまして、Plut によれば、アテナイに帰った時市民から告発され裁判されるのを恐れたからである。こうなるとニキアスという人は意気地なしであるばかりでなく卑怯者にも見えて来るのだが、Thuk (VII. 48. 3-4) はなぜ裁判をいやがったかも説明している。——自分にはよく分っているのだと彼は言う。アテナイ人は、自分たちが決議しないのに軍を引揚げるなどということを認めはしないだろう。そして軍の行動についてそれを認めるか認めないかを投票する人々は、現地で自分の眼で事情を見てではなく、他人から聞いたことに基いて投票するのであって、もっともらしいことを聞けば何でも信じてしまう連中だ、あるいは、今ここにいる(従って我々の実情を体験としてみずから知っている)将兵にしても、その大多数は、一旦故国に帰ったら何を言うか分りはしない、将軍たちは金で買収されて撤退したのだなどとわめくだろう、こういうアテナイ人の本性をよく知っているからには[27]、アテナイ人によって屈辱的な罪名で不正に殺されるよりは、

みずから敵の手にかかって討たれる方がよい云々。一口で言ってしまえば、ニキアスは自分の祖国も自分の部下もまったく信じていない、ということである。それでいて国家の公職、しかもこの当時では最も重要な公職についているわけで、だから怪しからんとも言えるし、だから悲劇だとも言える。いずれにしても彼の生きる道、あるいは立場と、彼の精神の間に矛盾があるのである。Dover はこの箇所について、ニキアスは誇りが高く、それ故自分が辱しめられることに臆病になって、そのために古今の将軍の中で最も恥ずべき主張——死刑にされるぐらいなら大船隊も何千の兵も投げ出して祖国を危殆に瀕させても構わぬ、という——をした、と言っている[28]。これはニキアスの言葉を意地悪く誇張した言い方だが、ニキアスに弁解の余地がないことは確かで、やはり卑怯としか言いようがない。しかしそれにもかかわらず *Hist* のこの箇所を読んでいると、ニキアスが卑怯になったのも分らぬではないという気持になって来るのは、Thuk が見るべきものを見、それを過不足なく言い得ているためであろう。——Plut が *Nik* 22. 5 で、シュラクサイに新手の軍が到着したりアテナイ陣内に疫病が発生したりしたために、ニキアスもついに折れて出航の準備をするように伝えた、とあるのは、*Hist* 50 の要約で[29]、結局は他の将軍たちに同意したことにより、彼の主張はただ出発を遅らせただけのこととなって、その分だけ彼の責めは大きくなった。

所がやっとニキアスが同意したと思ったら月蝕が起って、それでまた出発が延ばされたのは運がなかったとしか言いようがない。そしてその間にアテナイ軍のシケリア脱出を察知したシュラクサイ軍が、陸海両面において攻撃を仕掛け、アテナイ軍も必死に応じたが散々に傷めつけられた、というのが *Nik* 24–25, *Hist* VII. 51–56, 60–72 であり、これでアテナイ軍は完全にシュラクサイ軍の意のままに料理されることになった。デモステネスが海上から強行突破して脱出しようと提案したのに対して、ニキアスは同意したが今度は兵たちが応じなかった、というのも運命的である。運がよければこれによって血路が開かれたかも知れないと思えるからだが、そういう感想はわれわれが Thuk の記録を読んでいるだけだからこそ持てるのかも知れない。しかしこの時アテナイ軍は、シュラクサイのヘルモクラテスが「これほどの大軍に...撤退に成功されては...一大事」と考えたほどの兵力を未だに擁していたのである。

かくてアテナイ軍の死の行進が始まるが、*Nik* 26 はその出発に際してアテナイの将軍たちがヘルモクラテスの詭計にはめられてしまった話と、はめられ

たとも知らずに全アテナイの将兵が、悲惨と言ってもまだ足りないような気持をめいめいが抱いて出発する条である。ここで Plut は、ニキアスが病気のために体が弱り切っているのを無理して痛々しく見えたので、兵たちが彼の遠征反対演説を思い出して、この人がこんな目に遇うのは不当だと考えた、と言っているが、ニキアスが無理して元気な素振りをしていたのはその通りだろうが、Plut によっても Thuk によっても、この撤退のための行進の出発前夜の状況では、兵たちがニキアスのことをこのように思いやる空気はとてもない。むしろこれは、Plut 自身の感想を兵士に托して述べたのだろう。

敵の詭計にはまり込んで始まった行進は酸鼻を極めたものとなった（*Hist* VII. 76–85)。Plut はこれを一切描写せずに、一気にニキアスの投降へと話を進めている。事件としては大きくても、ニキアスの性格をとくに表わすものではないと見たのだろう。しかし Plut 自身も言っているように、この行進の間中ニキアスは兵士を励ますために大声で呼びかけながら歩いていて、Thuk はその言葉というのを記している（*Hist* VII. 77)。大略次のような内容である。——いかなることになろうとも希望だけは持て。私はかつて運に恵まれた者との評判を得ていた人間だが、その私にしてこの有様だ。しかし私は神々に対しても人々に対しても果すべきつとめは果して来た故に、私は希望を捨てもせぬし、私には今のこの苦しみを受くべき理由があったのだろうかなどと疑ったりもせぬ。今や敵方には幸運が続きすぎたし、われわれには——たとえこの苦難が神の怒りによるのだとしても——苦難という罰が十分与えられた（だからこれからはわれわれが運に恵まれるはずだ)。諸君は精鋭である。行進中いかなる所であれ戦を挑まれたなら、そこを死守すればそこが諸君の祖国となり砦となる。人間がポリスなのだ。城壁があろうと船があろうと、人間なくして何のポリスがあろうぞ。」[30]

この後惨憺たる行進を続け、途中で後詰めのデモステネスの部隊が投降したことを知ったニキアスが投降を申し出て、自分はどうなってもよいが兵たちは助けてやってくれと頼んだのをギュリッポスが容れずに殺戮を続けた後にやっと捕虜になることを許し、挙句の果にニキアスは処刑されてしまう過程も *Hist* に詳しい。ニキアスがシケリアで死んだことだけは確かだが、それが処刑されたのか自刃したのか、また処刑されたのならどういういきさつでそうなったのかについては、Thuk すら決めかねるほど諸説まちまちだったらしいが[31]、一番印象に残るのは、ニキアスがこれまでしばしば利用して来たシュラクサイ内の親アテナイ分子共が、ニキアスが捕われたからには、拷問にかけられて彼の

口から自分たちのことが露見しては困るというので、彼の処刑を主張したという条である (*Hist* VII. 86. 4)。

最後に Thuk はニキアスに哀悼の辞を捧げる (VII. 86. 5)。「彼はつねづね徳を心がけていたのであるから、今日のギリシア人の誰にもまして、このような不運な最期を遂げるべき理由はなかったのである。」Dover はこの讃辞について「Thuk をここまで読んで来た人は、ニキアスについてそれほど好意的な見方を恐らくしないだろう。」まずこう言ってから3頁にも及ぶ注をつけ、その中で4世紀におけるニキアス評価の概要 (総じて高い) をまで教えてくれるが、結論としては、「Thuk 以上にニキアスに対して厳しい評価を下す人でも、Thuk のこの言葉に同意したとて怪しむには足りない」と言っている。つまり、人間として普通の感覚を持っているならば、Thuk のこの言葉を別に異なものとも思わぬのが当然だ、ということである。

4

以上で Plut と Thuk の記述、とくにその相違点を一通り見たわけだが、その相違点の多くは、Plut は書いていないが Thuk は書いているという種類のものであった。これは、Thuk は Plut の10倍もの量を書いたのだからという風には片づけられず、むしろ、かりに Plut が Thuk と同じ頁数を費してもやはり書かなかったに違いないと思えることがあって、それが問題になる。なぜなら小論の初め (注 2) に指摘したように、Plut が Thuk と張り合うのは止めようと思ったのは、Thuk が歴史家であったからではなく、Thuk の文章が優れているからであり、第2に、Plut は「歴史ではなく伝記」を書こうと思い、そこで性格を表わしている事績は Thuk から拾おうとした、つまり彼は、性格を表わしていないと彼が判断した事績は捨てた、からである。しかも、大体性格を表わしていない事績などというものがあるかどうかが疑問だが、Plut が性格を表わしている事績を拾うと言う場合、それはどんな性格を表わすのでもよいというわけではないらしい。拾うべき性格は伝記を書く前から予め決められているようである。例えばわれわれの *Nik* ではどうなっているかと言うと、この伝記の 2. 4–6 に、ニキアスは重々しかったが峻厳だったり反感を抱かせたりするような所がなかったとか、気が弱かったとか民衆を恐れ(るように見え)たとか希望を抱かなかったとかいうことが述べられているのだが、この第2節というのはこの伝記の言わば序文の後半で、本文は第3節か

ら始まる。そしてその本文の中、上で見たシケリア遠征関係の部分に、この序文で挙げられていない性格を示すようなニキアスが現われていただろうか[32]。その上 Plut は、彼が予定した性格に合うように事件を少々潤色したり誇張したり単純化することがあるということもわれわれは見た。Plut がこの序の中でこういうことを書こうが書くまいが、ニキアスは臆病でペシミストだったのだから一向に構わぬと言うならば、それは誤解になる。なぜならば、ニキアスが温和で臆病でペシミストだったのはその通りでも、Plut 流の書き方だと、温和で臆病でペシミストなのがニキアスだということになって、ニキアスはそれ以外のものではなくなる心配があるからである。そしてわれわれが見て来た所では、Thuk が補ってくれたものというのは、ほとんどがこの温和で臆病でペシミストであることをはみ出した部分、あるいは、どうして臆病になったか、あるいはニキアスが臆病になったことでアテナイ軍あるいはシュラクサイ軍にどういう事態をもたらして、その結果今度はニキアスがどうしなければならないことになったか、というような種類のことだった。そして、性格などというものはここまで明して貰わなければ分るものではないと同時に、ここまでやれば、もはや性格を明らかにするという埒を越えて、人間を書く、延いては歴史を書くことになる。そこへ行くと、性格を明らかにすることに止まった Plut のニキアスは Thuk におけるほど性格が明らかでない。Thuk の *Hist* のニキアスと比べるなら、Plut の *Nik* のニキアスは類型的で抽象的である。

しかしニキアスが抽象的なら *Nik* は伝記にはならない。そこで困る。Plut 自身はもちろん伝記を書いたつもりなのだし、誰もが Plut が書いたのは伝記だと認めているからで、こういう場合自分一人だけ異を唱えるのは痛快ではあっても大抵は誤っている。しかしそうは言っても、Plut のニキアスが Thuk のと比べるならば抽象的だということは上の調査からも明らかである。ニキアスの事績をかいつまんだというだけでなく、その事績がいつどこで為されたのかということについて Plut が無関心だということも上で指摘した(35 頁参照)。こうして Plut のニキアスは歴史上の人物であることを止めはしないかも知れないが歴史との繋りが乏しくなる。なるほど Plut は「私は歴史ではなく伝記」を書くのだと断わっているのだし、伝記と歴史とは別のものではあろう。しかし伝記と歴史は無関係ではないはずで、私見では、伝記とはある個人の生き方を、その人間にとっての世界との関わり合において見る、あるいはその個人の中に集約された歴史を見るものであり[33]、伝記と歴史の違いは、視点を個人に集中するかしないかの違いにすぎない。Thuk にとっては個人は二の次でしか

なかったので、彼が書いたものは歴史になった。——するとやはり Plut が書いたものは伝記ではない。伝記ではなくて何なのかと言われると困るが、強いて言えば Plut がおびただしい数書いたエッセイと本質的にはそう違わないものであろう。性格を明らかにしてどうするつもりだったかと言うと、すぐれた人についてはその徳を知ってそれを真似たいという気持を起させ、非難に値する生き方について知ることによってすぐれた生き方を一層熱心に考察するようにさせる、というのが Plut 自身がしばしば述べている所である[34]。

以下は付録である。私一人があれは伝記ではないと言っても誰もがあれは伝記だと認めている、とくに Plut 自身も伝記を書いたと思っている、という問題について、この問題を解く鍵は一つしかない。それは、Plut は「伝記」を書くなどとはもちろんどこでも言っていない、彼が書いたのは *βίοι* だということである[35]。なるほど辞書で *βίος* の項を見れば 'biography' と書いてあって、biography なら伝記だとわれわれは信じてしまうが、実はここには三ヶ国語間の言葉の置換えがある。だから辞書にそう書いてあるからと言って、*βίος*＝biography, biography＝伝記。故に *βίος*＝伝記と決めてしまうことはできない。そこでわれわれとしては差当り、Plut は彼の時代に *βίος* という語が意味していたものを書いたのだと理解して、その *βίος* は歴史と縁がなくてもよかったのだろうと思えばよいことになる。そうすると大抵の教科書に書いてあることを思い出せばおよその事情は合点が行く。つまり *βίος* は歴史とは関係のない所から起って来たということも、文献がほとんどすべて失われてしまったためにはっきりと分らないことが多いにせよ、ペリパトス派の性格論が *βίος* の発展に寄与したらしいぐらいのことも分っていて、それなら歴史とほとんど無係係で性格に主眼を置く Plut の行き方とまったく同じだということになる。私が上で述べた Plut に対する不満のすべては、Plut の *βίοι* が伝記だと勝手に思いなしたことによるのであって、Plut に対して不当な要求をしたことになるのである。

1) *ἦθος καὶ τρόπος*. これは Plut の文のスタイルの一つの特色である *ἓν διὰ δυοῖν* の例。

2) *Alex.* 1. 2 の言葉を思い合わせる時、これは Thuk が書いたのは歴史で、然るに私は歴史を書くつもりはないのだと言っているように思えるが、実はそうでなく、Thuk の文章が到底真似できないほど優れているのでそれと張り合うつもりはない、と言って

いるのである。Plut が特に感心していたのは *ἐνάργεια* という点だったらしい。恐らく初期のエッセイである *De glor. Ath.* 347 A を参照。

3) *τρόπος καὶ διάθεσις*. これも *ἓν διὰ δυοῖν*. 上記注[1] 参照。この他に性格あるいはそれに近い意味を表わすものとして、Plut は *τὰ τῆς ψυχῆς σημεῖα* という言い方も用いる。*Alex.* 1. 3.

4) だからこそヘルメー像破壊事件のようなことが起るとたちまち嫌疑をかけられることになる。なお *Alk.* 16. 2; Thuk VI. 28 を参照。

5) *Nik* 12. 5; *Alk.* 18. 1, 2. これは人間を類型的に捉える Plut の特徴を表わしている。

6) Gomme, A. W., A. Andrewes & K. J. Dover, *A Historical Commentary on Thucydides*, Vol. IV (Oxford 1970), p. 230. この書物は Gomme の死後2人の学者がそれを継続したのだが、Bkk. VI & VII はほとんど完全に Dover の執筆である。以下この書物を *G.A.D.* という形で引用する。

7) VII. 48. 3, 4 でもニキアスは「アテナイ人の本性をよく知っている」と言っていて、そこでも彼のこういう発言はアテナイ人の民衆に対する不信の表明となっている。これと、*Nik* 2. 6 の、彼が *δημοτικός* だと思われて *δῆμος* から *δύναμιν οὐ μικράν* を得ていた、というのを付き合わせてみると面白い。ニキアスは臆病だったから民衆の機嫌をとっていただけで、*δημοτικός* などではなかったわけである。

8) *G.A.D.*, p. 231.

9) 民衆がこうまで熱狂している時にはこんなことを言っても通るはずもないのに通ると期待したのは、やはりニキアスが *δῆμος* というものを知らなかったからで、彼はやはり *δημοτικός* ではなかった、というより政治家ではなかったことになる。

10) この箇所を読むと、Plut にとってはニキアスは要するに弱気の人と言えば十分だったと思える。そういう性格を述べる方が先で人物そのものを描くことが後回しになっている。Dover も言うように (*G.A.D.*, p. 315)、Thuk を普通に読めばラマコスの説に最も賛成し易いだろう。

11) 彼自身巨大な軍備を要求した演説の中で (VI. 20. 7) '. . . *ἐπὶ ἃς μᾶλλον πλέομεν, Σελινοῦς καὶ Συράκουσαι* . . .' と言っている。

12) *G.A.D.*, p. 315 f., 339 f. を参照。

13) Plut が伝記を書いた人物は、その徳を模倣すべき立派な人物か、その真反対の人物だった (*Aem.* 1; *Per.* 1. 4; 2. 1-5; *Demetr.* 1. 5; 1. 7-8 を参照) が、特に前者については(場合によっては後者についてさえ) Plut は好意的な解釈をしがちである。

14) *G.A.D.*, p. 334. しかしこれでどうして将軍がつとまるか、今までどうしてつとまって来たかという疑問が起って来て、そうすると、ニキアスは運がよかったのだと考えるしかないと思える。なお注[24] を参照。

15) Plut にとっては行為はつねに行為者から外へ向うばかりで、その行為が周囲に惹き起す反応や、その反応が最初の行為者に逆に影響を及ぼすなどということにはなかなか考えが及んでいない。

16) *ἐνεργὸς καὶ δραστήριος*. これも *ἓν διὰ δυοῖν* の例。

17) Thuk は、このエピポライ攻めの後にアテナイ軍は650騎の騎兵を軍勢に得たと記している (VI. 98. 1)。それなら、今まで致命的だった「騎兵がいない」という弱点がこれで埋められたはずだのに、実に不可解なのは、この騎兵が活躍する場面というのが今後の *Hist* の記述の中にほとんど無く、アテナイ軍は相変らずシュラクサイの騎兵隊に悩まされ通しだということである。

18) 腎臓病だとはっきり書いているのは Plut だけで、彼がこの知識をどこから得たのか興味深いが、とにかく病気だったことは確かである。*Hist* VI. 102. 2; VII. 15. 1 参照。

19) *ὁρῶν τὰ ἐκ τῆς γῆς σφίσιν ἤδη, ἐπειδὴ Γύλλιππος ἧκεν, ἀνελπιστότερα ὄντα.*

20) Dover は、本当にすぐれたスパルタの将軍は連合軍の兵士を扱うためのこのような 'diplomatic' な技にも長けていたと指摘している (*G.D.A.*, p. 384)。

21) Plut はここで (*Nik* 19. 10)、*τὸν Νικίαν αὖθις εἰς ἐκείνους ἀποτρεπόμενον τοὺς πρώτους λογισμοὺς καὶ συμφρονοῦντα τὴν τῶν πραγμάτων μεταβολὴν ἀθυμεῖν* と言っている。情勢の変化を熟慮して無気力になったという所を見ると、*πρώτους λογισμούς* に戻ってというのは 18. 7 の *ἦν δ' ἐλπίδος μεγάλης* という状態になる前のニキアスに戻ったということだととれるが、*λογισμός* と言えば状態ではなく、理論とか方針とかいうもので、ここまでの所でこの名に値するものと言えば、例のレギオンでの提案しかなく、しかしこの期に及んでそんなことを考えたとは正気の沙汰ではないと思える。しかしニキアスが真面目にそう考えたらしいことは次の手紙の内容を見れば分る。しかしそれにしても、ニキアスのそんな申出でをアテナイ人が聴き容れるだろうと、一時にせよ彼が期待したとすれば、これはまた不可解なことである。ニキアスがアテナイ人の性質をよく知っていると一度ならず言っていることを思い出すなら、なおさら分らなくなる。まったく度を失い我を忘れているとしか言いようがない。

22) *G.A.D.*, p. 387.

23) アリストパネス『鳥』638 ff. Plut が *Nik* 4. 8 で引用しているプリュニコスなど。

24) Dover は、ニキアスは自分の成功を自分の知恵や能力や武勇のせいにはせず、幸運のせいにして妬まれるのを避けた、と *Nik* 6. 2 が言っているのを取り上げて、これは anachronism であって、5世紀のアテナイ人なら *εὐτυχής* だということはすなわち *θεοφιλής* ということだと考えたはずだ、と言っている。すると、後でも紹介するように、ニキアスはほとんど 'proverbial' と言ってもよいほど *εὐτυχής* だと言われているので、同時代における彼の評価はとにかく高かったと見なければならない。これももっと立入って調べる必要があるにしても、分らないことの一つである。彼の死後4世紀における評価は問題なく高い (*G.A.D.*, p. 461 ff. を参照)。

25) ニキアスおよびアテナイ側がいかに頭が働かなかったかということは *Hist* VII. 36. 6 の記述一つを見ても分る。ギュリッポスがアテナイ側の船の構造上の弱点を衝くように味方の船の構造を変え戦術もそれに従って工夫して攻めて来たので、アテナイ軍は海戦のたびに大損害を蒙ることになった、というのである。弱点を衝かれたのだから負けるのは仕方がないが、何も *ἐν ἁπάσαις ταῖς ναυμαχίαις* に負けるには及ばなかった。何とか対抗策というのは見つからなかったのだろうか。

26) Thuk のここの文章 (VII. 42. 3) 全体は長大な一つの文から成っている。*ὁ δὲ Δημοσθένης ἰδὼν . . . καὶ νομίσας οὐχ οἷόν τε εἶναι διατρίβειν οὐδὲ παθεῖν ὅπερ ὁ Νικίας ἔπαθεν*, (. . .), *ταῦτα οὖν ἀνασκοπῶν ὁ Δημοσθένης, καὶ γιγνώσκων ὅτι . . ., ἐβούλετο ὅτι . . .* 文中括弧で包んだ点線部は OCT のテクストで前後 8 行にも及ぶ挿入文である。Dover はこの挿入文について、VI. 64. 1 が似た構文でありながら、そこでは括弧内の文が対格と不定詞という構造であったのに対し、ここでは *Νικίας* を主語とし 'finite tenses' の述語動詞を持ち、しかも *ἦν οὐδ' ἂν μετέπεμψεν* というような従属文まで含んでいる、だからこの文は Thuk の考えを表わしていると見なければならぬ、と言っている (*G.A.D.*, p. 419)。確かに VI. 64. 1 と対比すれば間違いなくそうだと思えるが、この箇所だけを読んだ場合でも「. . . と見なければならぬ」と感じられるかどうかは甚だ微妙である。Thuk がこういう形で自分の意見を挿むという例は稀だろうし(これはを改めて調べなければならない)、括弧の後の *ταῦτα ἀνασκοπῶν* が括弧を跳び越えてその前にだけかかっているととるよりは、括弧内で言われている事情を含めて *ταῦτα* と言っているのだととる方が自然である。いずれも決定的ではないが、括弧内も第一義的にはデモステネスの考えだと見ることを支持してくれそうだと思う。

27) 注 7) 参照。これはアテナイ人に対する、というよりはアテナイの民衆に対する不信であろう。

28) *G.A.D.*, p. 426.

29) ただし Thuk は疫病のことは言っていない。ただ *ἀσθένεια* のためと言っている。

30) 私のこの要約は確かに、Dover が指摘しているように (*G.A.D.*, p. 453 f.)、ニキアスの論法をかなり単純化していることは認める。しかし単純化しなかった場合それによって分るのは、ニキアスがここでかなり取り乱した言い方で話しているということであって、彼が敬虔な神々を敬う人になっているという理解に変更を加えるには及ばないと思う。なお、このニキアスの言葉と、*Nik* 26. 6 のニキアスに同情する兵士の思いとして述べられている言葉——神助などというものが頼りになるかという——が際立った対照をなしている。

31) *Hist* VII. 86. 5: *ὁ* [Nikias] *μὲν τοιαύτῃ ἤ ὅτι ἐγγύτατα τούτων αἰτίᾳ ἐτεθνήκει.*

32) 一般に Plut の伝記の標準的構成は、比較すべき人物をも含めた 'Syzygia' への 'Prooemium' が初めにあって、次が第 1 の人物の家系、少年時代 (ここでは成人した時に顕著になる性格が、すでにこの頃にも見られるということと、その性格形成に教育が大きな影響を及ぼしているということが強調される)、それから後は大体時代順にその人物の事績を挙げて行く。次に第 2 の人物についても同じことが繰返されて最後に 'Synkrisis' が来る。そして Prooemium では 2 人の人物がいかに比較に値するか(つまり類似点) が挙げられることが多く、Synkrisis では 2 人の相違点が列挙されて、その各々について優劣を判定する。H. Erbse はかつてひどくはっきりしたことを言った ('Die Bedeutung der Synkrisis in den Parallelbiographien Plutarchs', *HERMES* 84, 1956, 398 ff.). Plut は言いたいことは Prooemium と Synkrisis で言っていて、本文はその敷衍にすぎないというのである。これは一見極端な解釈に見えるが必ずしもそうではない、というのが目下の私見である。

[33] ここまでは自叙伝でも同じだが、自叙伝には自己を語るという別の要素があって、しかもこれの占める重みが非常に大きいから、伝記と自叙伝を同列に論ずることはできない。

[34] 注[18]にあげた幾つかの箇所を参照。

[35] D. A. Russell, *Plutarch* (London 1972), 101 f. 参照。Russell も *βίος* が 'biographia' とは違うということを指摘した学者の一人だが、*βίος* は 'some connotations of *ordinary* life' を持ち、それを故叙事詩(あるいは歴史)向きの壮大な内容よりは、むしろ喜劇のリアリズムに連なるものだと言っているが、この典拠がシュリアノスのヘルモゲネス注釈だけだという淋しさはさて措くとして、このことが *βίος* 理解のためにそれほど重要なことだろうか。もし重要だと言うのなら、*βίος* はその萌芽期においては 'Encomium' であったという事実(だと私は思うのだが)があって、これは喜劇のリアリズムとは真反対にあるのだから、そういう Encomium としての *βίος* がそうでない *βίος* に移って来た時(というとペリパトス辺りを想定しなければならない)、喜劇のリアリズムに連なり得る *βίος* が書かれるようになったということになり、それこそ重要な問題になる。しかし今の所そういう問題について何かを言うには材料が乏しすぎる。Encomium とはまったく別の所から *βίος* は発生したのだと言うにしても事情は同じである。あるいはまた、Plut が *βίοι* を書くために取上げた人物というのは、良きにつけ悪しきにつけ Russell が言う意味での 'ordinary' な生活をした人間ではないのをどう解するか、さらに Russell は *βίος* が上記のようなものである所から生じる三つの特徴を挙げているが、この三つの特徴は必ずしもここに淵源を求めなくてもよいと思う。Russell の書物について批判がましいことばかり言ったので、公平を期して彼のために弁護をしておく、Russell のこの書物は最近における最も優れた Plut 入門書である。